



おわりに



浪江のこころプロジェクトプロジェクトリーダー
高崎経済大学地域政策学部教授

櫻井 常 矢

この度、『浪江のこころ通信』（以下、『通信』）がひとつの区切りを迎えることになりました。2011年7月1日の創刊から11年近く、これまで『通信』を支えてくださった町民の皆様、取材協力者の皆様、そして浪江町役場の皆様に心から感謝申し上げます。

『通信』は、これまで全119号が発行され、取材件数（『通信』掲載数）は466件、取材協力者は延べ132人となります。『通信』の発足から今日までをふり振り返り、数字の上での重みはもちろんのこと、積み重ねてきた出会いの一つひとつなど、その歩みの貴重さをあらためて実感しています。この総集編もまた、2014年3月（第1回）、2017年12月（第2回）に続き、今回で3回目の発行となります。これまでの経過をふまえ、あらためて『通信』が残したものは何か。最後に、その意

味を私なりに考えてみたいと思います。

第一にお伝えしたいのは、『通信』が人びとの「想いの記録」であることを大切にしましたことです。東日本大震災によって一人ひとりが失ったもの、悲しみ、悔しさ、避難先での出会い、喜び、これからの生き方への戸惑いや焦り、そして未来への一歩を踏み出そうとする力など、実に様々な想いに私たちは出会いました。そしてこうした想いを、何か一つの方向にまとめるのではなく、遠く離れた町民の皆様がともに共有できる環境づくりをひたすら目指しました。この取り組みを通じて学んだことは、ひとは決して前向きな話ばかりではなく、悲しみを共有するだけでも元気になれるということです。お互いの「違い」や「同じ」を確かめること。まさに「こころ（心）」の通信の意味がそこにあります。私どもの提案した『通信』を受け入れてくださ

り、これを着実に前進させていただいた馬場有元町長は、町政に対する厳しい町民の声を含め、すべての言葉をありのままに掲載することを最後まで貫かれました。前例のない広域避難という緊急事態の中で、『通信』はその時々の人びとの心をそのままに伝え、互いをつなぐことで一人ひとりの復興を支えようとなりました。

第二に『通信』は、震災復興のプロセスにおいて、町民の皆様が直面するに幾多の困難を乗り越える一助になろうとしたことです。「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」への区域再編（2013年8月）、そして帰還困難区域を除く避難指示解除（2017年3月）など、それ自身が復興への道程ではあるものの、その都度、町内にある地域（行政区）や町民の皆様の「分断」が現れたことも一面としてありました。特に2017年の一部避難指示解除は、それまで福島県内外のいずれに住んでいてもすべての町民にあった「浪江町に戻りたくても戻れない」という共通項がはずれ、町に「戻る者」と「戻らない（戻れない）者」という見方を導くことにもなりました。一部避難指示解除は、町民の一人ひとりの心情やお互いの関係をより複雑なものへと変えつつあるなかで、取材協力者たちはそのことを意識し、「分断」ではなく人びとがともに生きる道筋を『通信』をとおして実現したいと願い、この取り組みを続けました。

そして第三に、浪江町の皆様のふるさとへのこだわりが『通信』を支えたということです。『通信』は、まだ浪江町役場が二本松市東支所にあった2011年4月、私自身の提案として誕生したものでした。この経過については、第1回目の「総集編」に詳細に書いていますが、当時は役場も大混乱でしたので、町民の避難先（所在地）も不明な中で各地を訪問取材し、その声をまとめて毎月発行するなど途方もないことだとの受け止めでした。それでも、志ある役場職員や取材協力者の協力のも

と、『通信』は動き出しました。そして11年近い歳月を、様々な課題に直面しながらも地道に進んできました。あらためてふり返り、なぜこうした取り組みが実現できたのか。なぜ私たちは『通信』を続けることができたのかを自問するのですが、その答えはほかの何物でもない、取材の度にお会いする浪江町の皆様一人ひとりのふるさとへのこだわりだったということです。

あるご夫婦への取材では、お互いがお互いのふるさとへの想いをあらためて知るなかで、ともに涙する姿がありました。都内のアパートの一室で、津波で亡くなられた夫の遺影を胸に抱きながら、しかし明るい表情で以前のように元気に生きていく決意を語ってくれた方もおりました。精神的につらい面持ちの母親の前で、あえて笑顔で浪江での想い出を話してくれたご姉弟にも出会いました。取材を通じて私たちの『通信』の取り組みを知り、「私も浪江町のために何か取り組みたい」と具体的な行動を起こした方もおられました。住んでいる場所、復興への思い、その後の生き方などは別々であっても、その背景には浪江町という共通のふるさとがありました。取材する私たちがうらやましく思えるほどのふるさとへのこだわりが、『通信』にかかわる者たちを突き動かし、11年にもわたって続けることができただけです。『通信』が人びとを支えたのではなく、町民の皆様のふるさとへのこだわりが『通信』を支えていただいたのだということです。

このようにふるさとを想う浪江町の皆様に出会えたことは、私たちにとっても貴重な財産となりました。『通信』を通じて出会えたつながりは、これからもずっと続いていきます。あの東日本大震災から今日までの浪江町の人びとの想いの記録が、皆様にとってのふるさとの一部となり、今後も皆様とともに歩み続けることを願ってやみません。これまでの取材へのご協力、そして『通信』を愛読していただいた皆様に心から感謝申し上げます。これまで本当にありがとうございました。